

翻訳

E. M. フォースター

『1918年から39年に至る英語散文の発達』

1944年4月27日

第5回W. P. ケア記念講演（於グラスゴー大学）

井 関 隆

私がこれから申し上げようとする主題は、過去四半世紀における散文の発達であります。特定の作家に特に関心を向けたり、作家の一覧表をお見せすることはしません。いろいろな作家に言及しますが、それは例としてであります。またこれ以外の忘れられた作家のことが皆様の念頭に浮ぶかもしれません。しかし私達の主な目的は、この時期の散文に見られる一般的な傾向を考察することにあります。

この時期とは、二つの大戦に挟まれた時期で、〈長い週末〉と呼ばれてきました。この時期に出版された本の多くがそうした特徴をもっています。或るものは、シーグフリード・サスーン¹の『或る歩兵士官の回想』〔1930〕のように後ろを振り返るもので、過去の悲劇を記録に残そうとします。また或るものは、前方に目を向け、30年代にヨーロッパに降りかかった災難²から目をそらすか、これを解説しようとしします。そしてリットン・ストレイチー³、ジョイス⁴、またはヴァージニア・ウルフ⁵の作品のように、たとえ内容が直接戦争に関わらない作品も、やはり不安、幻滅あるいは懸念を示しています。それに、こうした作品は、自らを心もとないと感じている或る文明の所産なのです。フランスのセヴィニエ夫人⁶は、17世紀末の幾つもの戦争の間^{かん}にあって、手紙を書くことで心の平静を保つことができ

ました。イギリス女性ジェイン・オースティンは、ナポレオン戦争下で小説を書き、気が休まるのを感じたのです。そうした戦争は全面的なものではありませんでした。しかし、私達の二つの大戦の最中や両大戦に挟まれた時期に、小説を書いて戦争の影響を逃れることなど誰にもできません。従って私達の散文には明瞭な一つの特徴があります。それは、戦争が頭から離れない人間の産みだすものだということです。そうした人間がなにも憂鬱であったり、ヒステリックであったりするとは限りません。むしろ陽気で、まともで、勇気のある場合も多いでしょう。しかしながら、僅かでも感受性を持っている作家なら、世界がどのような混乱に陥っているかを知っているべきです。もし感受性を少しも持たないというなら、そういう連中は読むに値しないでしょう。

従って、それが第1の要点です。即ち、二つの大戦に挟まれた長い週末だということです。第2に、便宜上この週末を二つの時期に分けることができます。——1920年代と1930年代です。この区分は、はっきりしたものではないのですが、一応の役には立ちます。20年代は戦争が終るとこれに反発し、手を引いてしまいます。30年代は戦争を恐れはしますが、戦争に向って引きずられていきます。20年代は人生を楽しみ、人生を知ろうとします。一方30年代のほうも人生を理解しようとするのですが、それは特定の目的のため、即ち文明を保持するためです。30年代は社会の動きに無関心で居られなくなります。ローズ・マコーレー⁷は、『イギリス人の生活』という小さな本の中でこの二つの時期を手際よく対比しています。

「20年代は、並みの10年よりは良い10年でした。つまり、陽気で、派手で、知的で、豪華で、洗練されていて、写真、日曜映画、^{シアタークラブ}演劇倶楽部、シュールレアリスム⁸、鋼製家具、かすかに曖昧な詩、プルースト⁹、ジェイムズ・ジョイス、ダンス、屋内スケート、部屋の壁に掛ける大きな絵のブームがありました。

次の10年は、もっと真面目で、洗練を欠き、美感に乏しく、さらに政治的でした。恐慌の風がすきま風のように吹き荒れて誕生したこの10年は、

戦争小説が山火事のように焼えさかって幕を閉じたのです。前後二つの破局の間に、共産主義者とファシストが闘い、説教合戦をしました¹⁰。そして人々の目は心配そうに、北海の彼方で地下ピヤ・ホールから王位より高い地位へと、金切声を出すびっくり箱の人形よろしく飛び上った、人を驚かさず脅し屋〔ヒットラー〕に向いたのです。』⁽¹⁾

ローズ・マコーレーは、明るくあっさりと書いていますが、彼女は賢明な案内役であり、寛容、寛大、リベラルであるのに加え、勇気があります。そして彼女の社会や社会的価値観への判断は常に健全です。彼女はこの二つの10年間を大変うまくまとめています。

しかし、むろん言うべきことはもっとあります。この世には、平和や戦争より強力な影響力を持つものがあります。それに、自分達の過した時期やその時期に書かれた本について、私達が本当に理解できるのは、流行や政治、それに軍人達が挙げた成果や失敗などより、さらに深い所を、私達が見てからのことなのです。一つには、英国を含め世界全体を呑み込みつつある、経済の巨大な動きがあります。それは150年前に始まったのですが、1918年以降加速され、非常なスピードがついて、国や個人の生活にあらゆる種類の変化をもたらしました。それは色々なものを組織、計画し、社会の拡大を目指しました。またそれは、封建主義と土地に根ざす諸関係の打破と、貴族から官僚、事業家、機械屋への権力の移行を目指したのです。おそらく、それはやがて民主主義となるつもりでしょうが、今のところはまだそうになっていませんし、私個人としてはそれを好みません。殆どの作家がそうなるのを好まないと思います。どんなに一般の人々が民主主義をひたすら讚美し、機械を讚えたところで。しかしながら、私達がどんなにこの経済の推移を嫌おうとも、それが局地的な平和や戦争にくらべて、非常に重大な影響力を持ち、絶えず私達の有り様を変えてゆくということは認めなければなりません。この経済の推移は、科学の応用に依存しており、科学が応用される限り続いてゆくことでしょう。たとえ或る作家がそれから逃れ得るように見える時ですら—— T. E. ロレンス¹¹のように

——やはりそれに制約されるのです。T. E. ロレンスは産業主義の進行を嫌いました。彼は皆様のグラスゴー市、私のロンドン市が代表するものを嫌ったのです。彼は産業主義を逃れ、古き時代の冒険を探してアラビアの砂漠、最後のロマンティックな戦争へと出かけてゆき、後には自身の心の砂漠へと入ってゆきました¹²。私は、彼が逃げだしたのは正しいと思います。なぜなら多くの場合、作家の書き手としての義務は、作家が社会に対して負ういかなる義務にもまさるものであり、しかも作家はしばしば孤独な隠遁生活を送るべきものと、私は信じるからです。けれども、もちろんこの逃走は失敗しました。産業主義が結局はT. E. ロレンスを滅ぼしたわけで、彼が死に至ったのはアラブ人の槍によってではなく、大馬力のオートバイによってであったのです。こんにち普通の生活とは、工場や会社での生活であり、戦争ですら冒険からビジネスへと発展し、農業まで科学的になってしまい、保険が慈善にとって代り、身分が契約に道を譲ったというような不愉快な事実には、私達は直面しなければならないのです。皆様は作家にとってこの全てがどれほど心を乱すものか、おわかりでしょう。作家は、美しさや魅力、四季の移り変わり、気高い行為、自分の伝統的な文学技法を愛していますし、愛すべきなのですから。またこの四半世紀の間、一部の作家達がどんなに途方にくれ、シーグフリート・サスーンのようにノスタルジアへと誘われたり、或いはイヴリン・ウォー¹³、グレアム・グリーン¹⁴のように嫌悪の気持に駆られたりしたか、皆様には良くわかっていただけるでしょう。

しかし土地から工場へというこの経済の動きは、私達の時期に力を得た唯一つの大きな動きというわけではありません。私はこのほうにならもう少し熱心になれるのですが、心理学の動きもあったのです。人間は自分をさらによく理解するようになり、自身の矛盾も探究し始めています。この探究は便宜上フロイト¹⁵という大した名前と結びつけられていますが、フロイトというより、空気のように一般的になっています。これはフィクションの技法を大いに豊かにしました。それは人間性の描写に微妙さと深みとを与えたのです。私達の誰の中にも存在する潜在意識、ときおり見ら

れる分裂した性格，とりわけ自分が合理的とうぬぼれている人々に根強く残る非合理的要素，夢の重要性や妄想の多さ——ここには小説家達がしかと掴まえ，歴史家も無視し得なかった点がいくつかあります。この心理は，新しいものではなく，新しく表に浮び上って来たのです。シェークスピアも無意識のうちに潜在意識というものに気付いていました。エミリー・ブロンテ¹⁶，ハーマン・メルヴィル¹⁷などもそうでした。けれどもこれについて人々がはっきり知るようになったのは，漸く今世紀の初め，サミュエル・バトラー¹⁸の『万人の道』〔1903〕によってであり，1918年以降になって，部分的にはフロイトのおかげでやっと一般的になったのです。今や潜在意識は力を増し，経済の動き同様，戦争とか平和の影響を蒙っていません。もちろん作家は，何についてもそうですが，潜在意識のことをうっかり知らなくてもかまいませんし，それが可能性をもつものと実感して応用する代りに，単にきまり文句として応用することもできます。このような無知な〈心理学者〉には，彼（或いは彼女）のきまり文句をのべつまくなしに応用して，いつも「あなたはしないと思っているが，する」とか，「あなたはすると思っているが，しない」などと言う人がありますが，なんとも腹立たしいものではありません。しかし，私達の時代のもっと優れた人達は——何と豊かな収穫を得たことでしょうか。フランスではまずブルーストです。またガートルード・スタイン¹⁹と彼女の自由な会話体の実験，——彼女自身の場合あまり成功していませんが影響力はあります——わが国のもう一人の先駆者，ドロシー・リチャードソン²⁰の小説。D. H. ロレンス²¹の後期の作品，ヴァージニア・ウルフ，ジョイス，デ・ラ・メア²²，エリザベス・ボウエン²³の小説です。歴史学も得るところがありました。個々の人間を調べる，この新しい方法は，過去を解釈し直す助けとなったのです。オルダス・ハクスリー²⁴の『灰色猯下』〔1941〕は，その一例です。——それはリシュリュウ卿と，彼の助言者ジョセフ神父について新鮮な見方を，即ち彼等の内面についての新鮮な見方を提出しています。リヴィングストン・ロウズ²⁵の『上都への道』〔1927〕も，もう一つの例です。即ち，コールリッジの天分と気質に関する新しい見方を提出している

からです。それに、これはとても重要なことですが、クリスチャンの歴史家アーノルド・トインビー²⁶の偉大な小説『歴史の研究』〔1934-54〕があります。これは、歴史を人類が主張したり達成したことの記録と見るのと同時に、人類が考えたり感じたりしたことの記録と見做すもので、こうした特別な材料を用いて諸文明の盛衰を記述しようとしています。トインビー教授は、文明が宗教的法則に従って盛衰しており、主、家をたて賜ふにあらずば、^{たつ}建るものの勤労は空し²⁷という結論に達しています。あるいは、もし旧約聖書よりフロイトの言葉の方がお好きなら、意識は潜在意識にじゅうぶん基かなければならないといってもよいでしょう。

ですから、私達の時期を二つの大戦間の中休みと考えても許されるのですが、この中休みが、さしもの両大戦も取るに足らなくなるようなもっと大きな動き——即ち、農業から工業へという経済の動きと人間性を解釈し直しつつある心理学の動き——の一部を成しているのを忘れてはなりません。これら二つの動きは一段と速くなっており、私の判断では、作家は経済の推移には悩まされていても、心理学の推移には刺激を受けています。また、ついでにもう一つのファクターを思い出していただきたいと思います。それは、アインシュタインの仕事に代表される物理学の推移であります。文学者がアインシュタインを理解できるかですって？ もちろんフロイトにも増してわかりません。しかし、相対性という考え方は空気のようにすっかり一般的になって、小説のある傾向に役立ちました。ディッケンズの作品に見られる絶対的な善人とか悪人は、めったに小説にはでてきません。同じ登場人物が、他の人物との関係だとか、状況が変わるのに応じて善人にも悪人にもなるのです。人の背丈を正確に測ることなどできません。物指し自体の長さが絶えず変っているのですから。私の知る限り、文学における相対性が最上の形であらわれたのは、プルーストです。尤も、イギリスの作家にも例はあるのですが。プルーストの作中人物の大部分は非常に嫌味な人物ですが、その中のどれ一人として、悪いと片付けて安心するわけにいかないのです。或る状況に置かれると、そうした人物の中で最も嫌味な人物、ヴェルデュラン夫人²⁸ですら高貴な振舞いが可能です。プ

ルーストや他の人達がこうした態度をとるのは、彼等が科学に通じているからではなく、相対性という考え方が、無意識の自我という考え方と同様普及し、彼らのものの見方を染め上げたからです。

さてここで散文の特徴についてひとこと言っておかなければなりません。散文は詩と違い二つのことをします。即ち、日常生活で役立つのと芸術作品を創り出すのとの両方です。たとえば、私はユーストン²⁹からグラスゴーへは散文を使って旅をしてきたわけですし、今も散文を口にしています。そして、ジュルダン氏³⁰のように自分が散文を用いているのに気付いてびっくりするのです。というのは、散文は私達の実用上の目的に役立つほかに、偉大な文学もつくりだすからであります。

さて、批評家を取り組まなくてはならない問題の一つは、この二つの散文の間の仕切りが水も漏らさぬようなしっかりしたものではなく、一方が他方へいわば絶えず滲み出ていく状態だということです。実用的で平俗な散文も、書物となるような念入りで芸術的な散文に、常に変りつつあるのです。実際、もしそうでなければ芸術的散文は色あせ、面白味がなくなりますから、到底生き延びることはできないでしょう。それを今使われている言葉で補充してやらねばなりません。そして私達が扱っている時期には、この補充が大いになされたのです。新しい言葉や句——また更に重要なのは、それ等を用いて表現された新しい考え方ですが——は作家によって急速に吸収され、本に取り込まれたのです。それが私達が問題にしている時期の一つの傾向です。外に適切な言葉がないので、平俗化傾向とでも名付けておきましょう。作家は、自分がその時代の人間の一人だと感じていますから、皆と同じようなやり方をしますし、同じようにしたがりです。それに作家は、皆に理解されたいと思い、そのため堅苦しくないはっきりした言葉を使おうとするのです。そうした例をいくつか挙げましょう。ここに手紙からとった小さな例があります。1918年に私が知らない人から手紙をもらっていたら、それはきっと'Dear Sir'で始まっていたでしょう。今日もし私が知らない人から手紙をもらえば、それは多分'Dear Mr. Forster'で始まっているでしょう。書き出しの形式の一方がも

う一方より意味があるわけではありませんが、あとのほうが親しみがありません。私はそれが他の俗語同様、アメリカから入って来たのだと思います。これは言葉の風がどちらに吹いているかを示すものです。別のしるしは、公的な人々のスピーチです。彼等は次第に形式ばらなくなってきました。——その一部はラジオの影響です。というのは、彼等も、もし仰々しくなりすぎれば、聴いている人々はスイッチを切るとわかっているからです。本能的に形式ばらない話し方をする、ウィンストン・チャーチルのような人達もいます。この人のスピーチは、耳にするにしても眼にするにしても、前の大戦時の首相のスピーチより庶^{デモクラティック}民的な感じがします。小説家もこうした親しみがあって、もったいぶらない調子を出すようつとめているのです。クリストファー・イシャーウッド³¹の『ノリス氏汽車を乗り換える』〔1935〕はこの一例です。イシャーウッドは非常に知的な人物ですが、いつも読者が自分と同じくらい知的なものとして書いています。彼は庶^{デモクラティック}民的で良い文体を持つ好例で、読者を信頼しているのです。別の小説家、アーネスト・ヘミングウェイは新しい会話の手法をとり入れています。言葉の風がどちらに吹くかを示すもう一つのしるしは、公文書、声明書がわかり易くなっているという傾向です。官僚は渋々やっているのですが。というのも、彼等が自分の発言内容を明確にした場合、同時に外の何かを失いはしないかと危惧するからです。それでも彼等はそれを実行しています。A. P. ハーバート氏の叱咤を受けてそれをやっているのです。彼等は、私達にも理解できる命令を出すようになりました。私達は命令のもとで暮しているのですから、これは良いことです。

私は、こうした散文の平俗化傾向の例をずっと並べてゆくこともできるでしょう。私達は権威ある人々の「基本英語」へという要求の一例を挙げたわけです。これがやさしい英語に関する本の売れゆきに役立つ思いつきであれば結構なことですが、私にはそれが英語を貧しくする以外に文学とどう関係があり、文学にどう役立つのかわかりません。私は別種の例、即ち欽定訳聖書の英語に言及することで、このくだりを切り上げたいと思います。この聖書は、わが国の 17 世紀の言葉の偉大な記念碑で、ここ 300 年

間にわたり、私達の口語、文語に影響して来ました。そのリズム、その雰囲気、その言い回しは、わが国の人々のものとなり、わが国の本の中に流れこんでいます。バニヤン、ジョンソン、ブレイク、ジョージ・エリオット、皆その^{こたま}の筈です。ところで、10年ほど前、『文学として読むための聖書』³²という聖書の或る版が現われました。その出版は、私達の或るものにはショックでした。それは欽定訳聖書の英語が、遂に普通の英語から遠いものになったことを認識させられたからです。このことは、サマセット・モームによる書評に、非常に巧みに書かれています。彼によれば、聖書の英語は、わが国の国民的遺産の一部だが、現在の表現と余りに違ってきたので、どんな作家も、それを学んだところで役に立たないというのです。私は、これから聖書に学んだ或る作家を引用するつもりですが、全体としてはサマセット・モームの言い分は正しいし、今や私達自身と欽定訳聖書の間には、文体に関し橋が掛けられない程の溝があります。そしてこの溝は1920年頃、即ち、私達がこれまで論じてきた他のいろいろな影響が強まった時期に広がったのです。聖書からの引用というのはたいてい陳腐で鈍感なものとなり、書き手や話し手が勞せずして強い印象を与えたいと思う時のみ行われているのです。タイムズ紙に載った電信電話会社、ケーブル・アンド・ワイアレスの次の広告はいかがでしょう。この広告は、同社のスタッフの昼食会で閣僚オリヴァー・スタンリー大佐によって行われたスピーチを報じています。

「戦争が終り、勝利が得られた暁には、歴史が論功行賞を開始するでありましょう。私達は一人残らず我が身を省みることになるのです。……私達は誰に功あり誰に功なきかを論じるでありましょう……わがケーブル・アンド・ワイヤレスの演じた役を論ずる折には、私はいささかの疑念も持ちません。国家の下す^よ評定が——『宜いかな、善^{ぜん}かつ忠^{ちゅう}なる僕^{しもべ}』³³となることを。」⁽³⁾

むろん、ケーブル・アンド・ワイヤレスは良くやりましたし、それに値

するでしょうが、私はそれをマタイによる福音書の言葉で祝うのは相応しくないように感じます。そして、もし聖書の英語が、スタンリー大佐の常套句の引き出しの中にあっただけではなく、大佐の血となり肉となっていたら、彼はそんな言葉を使わなかつたらと考へます。これは欽定訳に対する鈍感さの一例であり、聖書の英語と平俗な英語との完全な分離の一例です。同様の例で、こんどはミルトンに対する鈍感さを示す例ですが、戦時労働者のポスターに「彼等、共に奉仕せり³⁴」というスローガンがありました。

散文が平俗化する傾向についてはこのくらいにしましょう。私はそれが様々な形をとり、文学に新鮮さ、打ちとけた調子、新しい用法、^{デモクラティック}庶民的な良い文体を持ち込む一方で、卑俗さや平板さをも持ち込んでいるということを示したのです。さて、別の傾向ですがそれに私は秘義的という名を付したいと思ひます。これは、一部の作家達——一般には卓越した作家達——が、世界中いたる所に転がっている流血と愚劣さの組み合わせなどよりましなものを創り出したいとする欲望です。そうした作家はしばしば酷評を受けます。皆様は、リットン・ストレイチー、ヴァージニア・ウルフ、ジェイムズ・ジョイス、D. H. ロレンスや T. E. ロレンスが、私達を奮い立たせて呉れるようなことを余りしていないと不平を言われるかもしれませぬ。しかし、彼等が私達の時代の有力な作家であったことを認めていただかねばなりません。今はシェイクスピアやセヴィニエ夫人、あるいはジェイン・オースティンを産み出せない時代なのです。つまり、感受性の鋭い人々なら快適と感ずることができず、心の中にその埋め合わせとなるものを求めずには居られない時代、聖オーガスティン³⁵をして『神の国』を書かした時代に、或る点で似通った時代なのです。聖オーガスティンは眼こそ外の世界に向けましたが、思念を巡らせたのは内面の世界においてでした。彼もまた秘義的でありました。私が挙げた作家達は、自分の外の世界に眼をやって素材がそこに在るのを見つけてます。しかし、彼等は暫しの間、容赦なく吹きつける突風や霧から身を護り、素材を整え、心の中で作り変えるのです。T. E. ロレンスについてももう少し。『智慧の七

柱³⁶』は最も謎めいた本です。ロレンスは行為の世界で活躍し、私達の殆どが英雄と見做すものになりました。——生来勇敢で私心なく、謙虚で親切、しかし必要とあれば無慈悲にもなり、自ら高貴にして他をも高貴な行為へと奮い立たせ、人を魅了する力を持ち、生れながらの統率者。それに最後の華麗な戦争でダマスカスの勝者となる。かかる男は、たとえ本人は不幸であろうと、自分の型に忠実であろうとします。彼は行動の人、外向性の人たるを失わないでしょう。しかしながら、『智恵の七柱』を読むと、私達は勇壮な戦闘、風光の鮮かな描写の下に——繊細さ、内省心、洞察力、疑念、物質界に対する嫌悪があるのを知ります。これは、20世紀文明に適合できない男、獣性を残すアラブ人を、彼等がその文明に挑戦するが故に愛す男が書いた本であります。次の引用文にそれが見られます。最後の文章での列強に対する攻撃、即ち、ヴェルサイユの平和を破綻させた西欧固有の商業主義への攻撃に注目して下さい。

「彼等の心（アラブ人の）は奇妙で暗く、意気消沈と意気軒高とが相半ばし、一定性に欠ける。しかし、信仰の熱烈さ、信仰心に富むことでは世界のいかなる民族にも勝っていた。彼等は衝動的に行動する民族であり、抽象理念が彼等を動かす最上の動機で、ことを行う過程では限りなき勇氣と多様さが表われ、結果は無同然であった。彼等は常ならぬこと水のようにであったが、遂には水に似て支配をあまねく行きわたらすであろう。生命が兆して以来、相次ぎ寄せる波のように、彼等は肉体の岸辺めがけて突進を繰り返してきた。どの波も砕け散りはしたが、海そのまま、おのれを砕いた花崗岩を僅かなりとも削り去り、時を経ていつの日か、かつて物質界があったその上を、遮るものとしてなく寄せ返すであろう。かくて神はその水面^{みな}を渡ってゆかれるのである。そんな波の一つ（最小ならざる波ではあったが）を、私はささやかな理念の前に押上げ漂わせてみた。すると遂にそれは波頭なす高波となって逆まき、ダマスカスの上に落ちて行ったのである。打ち寄せたこの波は、既存のものの抵抗に押し戻されはしようが、次なる波の実体となって、とき満ちた折には、海を再び押し上げるである

う。』⁽⁴⁾

『七柱』は、その偉大さにも拘らず、ある時期を代表するには風変わりすぎる本であり、同じことは別の奇態な傑作、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』〔1922〕にもあてはまるのです。代表的な例として私はむしろリットン・ストレイチーの『ヴィクトリア女王』〔1921〕を採りたいと思います。この本はいくつかの理由で重要です。つまりそれは私達が扱っている時期の初め（1921）に出た本で、天才の作り上げたものであり、また伝記の手法に革命をもたらしました。ストレイチーは、むろん暴露をやったのけました。彼は誇張、偽善、愚鈍を嫌い、水増しされた評判を疑って、賢明にも膨れた評判に針で穴を穿ちます。彼はヴィクトリア時代の中に、これは自らを全くまじめに受け取った時代でしたが、彼の鋭い矢を放ちたくなる標的を見出したのです。しかし彼は暴露屋よりはるかに上質でした。彼はどんな伝記作者もそれまでしなかったことをしました。つまり自分が対象とするものの内部に、何とか入り込んだのです。マコーレーやカーライルのような少し前の伝記作家達は、見事な、説得力ある人物像を産み出しました。リットン・ストレイチーのほうは、自分の人物達を動かしてやります。すると小説の人物のように彼等に血が通ってくるのです。つまり、彼等を内面から作り上げるといふか作り変えるわけです。ただ、時には彼等の姿を捕え損ったりもしています。ゴードン將軍³⁷の人物像は疑問視されていますし、秀れた後期の作品『エリザベスとエセックス』〔1928〕もそうです。しかし、たとえ上手に描いていない時ですら、彼等は生きて見えるか見え、『ヴィクトリア女王』では、彼の出した色々な事実にも手厳しい異議は出ていません。そして無味乾燥な記録に基きながらも、社会全体とその住人とが墓から身を起し、歩き廻るのです。これが彼の行なった偉大な貢献であります。彼は内面的な仕事をした歴史家で、過去の骨を拾って材料とし、自分を取り巻く混沌とした現実よりも、一段とリアルで満足のゆくものを作り上げたのです。彼は私達の扱っている時期、特に20年代の典型で——20年代を通じ彼の影響は絶大なものがあります。今日でこそ

影響は下降線を辿っていますが。それは一つには、人々がまた自分を深刻に深刻にと考えるようになり、人間が笑いの対象とされるのを好まないせい입니다。もう一つの理由は、ストレイチャーに一部のうんざりするような模倣者が居り、この連中が彼の手法の評判を落しているからです。しかしながら、そのようなことはどうでも良いことです。評判にはいつも浮き沈みがあるものなのでありますから。問題は良い仕事かどうかで、『ヴィクトリア女王』は傑作です。それは、時代ものの行列ですが、この華麗な行列が通過してゆく際、皆様も私も、即ちつまらぬわれわれ読者もどうにか行列の中へ入り込み、人知れずそっと王族や政治家、廷臣や下っぱ役人の間に立ち混り、彼等が口に上さずにいる考えを耳にするのです。

ほんの取るにたりぬ一節ですら、ボーイ・ジョーンズについての一節のようにそれなりの歴史的役割を持っているのです。リットン・ストレイチャーは、陽気な人物で、ふざけるのやナンセンスが好きでした。彼はそれを自分の仕事の中で生かす方法を知っていたのです。謎めいたボーイ・ジョーンズ、即ち1840年に繰返しバッキンガム宮殿に侵入し、そこに潜んでソファの下にいるのを見つかり、「スープや他の食物を自由に取って食べ、王座に座り、女王を眺め、王女がわめき立てるのを聞いた」と告白した小柄な若者のエピソードを通じて、ストレイチャーは、王宮に存在した家庭のどたばたを再現し、この時代を生き生きと甦らせました。次に彼はもっとまじめな話題に転じます。

彼がまじめに取り上げた話題はどんなものだったでしょう。政治的な理想とか堅実な改革とかではありません。彼はこうしたものに T. E. ロレンスとは別な意味で幻滅していました。彼はしかし、ウィットと貴族的で立派な態度を信じており、真実の追究では非の打ちどころがありません。その上彼は人間同志の誠実さを信じていました。この点に、またこの点にだけ彼の心の暖かみが出てくるのです。彼は誠実な愛にはいつも感動する人で、アルバート公³⁸とその霊に対する女王の愛がこの本に明るさを与え、堅苦しさを減じています。私はストレイチャーの愛情信奉を彼のふざけ好き同様、強調したいと思います。この二点は忘れられていることが多いですか

ら。ここで私は、この本を締めくくる女王の逝去を述べた有名な箇所を読もうと思います。彼は堂々たる歴史家として開始し、次に主題から静かに退き、それから女王をいわば引き潮にそっとのせ、彼女が幾層もの人生の喜びを通り抜け、もやに包まれた生誕の時へと漂い戻ってゆくようにしています。

「その年の終りには、潮がひくように弱まった最後の力も、殆んど彼女の身体から去ってしまっていた。そして新しい世紀の初めの数日が過ぎると、彼女の弱まりゆく力が、ただ意志の力で保たれていることが明らかとなった。1月14日、彼女は南アフリカから数日前に凱旋したロバーツ卿をオズボーン³⁹で一時間引見した。彼女は強い関心をもって、戦争のあらゆる細部につき下問した。彼女は巧みにこの骨の折れる仕事を乗切るように見えた。しかし、謁見が済んだ時、一挙に衰弱が来た。翌日、侍医団は彼女の病状が絶望的であることを認めた。それでも、なお二日間、この不屈の精神は闘い続けた。更に二日間、彼女は英国女王の義務を果たした。しかしその後執務もとりやめとなった。それから、否、そうなって初めて、彼女の容態に関し、最後の楽観的観測が消えた。脳に衰弱がきて、生命が静かに去りつつあった。彼女の家族が枕辺に集まった。もの言わず、明らかに意識のないまま彼女は僅かに永らえ、1901年1月22日、彼女は死んだ。

二日前、臨終近しとのニュースが公けにされると、驚きと悲しみが国全体を蔽った。それはまるで、自然の運行に何か巨大な逆転が起きかけているかのようであった。延臣の大多数は、ヴィクトリア女王を戴かぬ時を思い出せなかったのである。女王は、彼等のあらゆる企てに欠くことのできぬ一部となっていて、女王を失うかも知れぬということは、殆どあり得ない考えのように思われた。彼女自身、眼も見えず、黙したまま横臥していると、枕辺に侍すものにとっては、ものをおもう力がすっかり失われてしまったように——既にそれと知らぬまま、忘却の彼方へと去ってしまったように——思われた。しかしおそらく彼女もまた、意識という秘密の小部屋の中に自らの思い出を秘めていたのであろう。薄れゆく意識の中で、

おそらくはもう一度過ぎ去った影の数々を呼び起こし、長い年月にわたるあの消えた幻影を、最後に再び追ったのであろう。——年月の雲間を抜けて、^{あと}後へ^{あと}後と、古き記憶からさらに古き記憶へとさかのぼりつつ。——ビーコンズフィールド卿⁴⁰に贈るさくら草⁴¹咲き乱れるオズボーンの春の森——パーマストーン卿⁴²の風変りな服と尊大な態度——緑のランプに照らされたアルバートの顔、バルモラル⁴³でアルバートが仕留めた最初の牡鹿、青と銀の制服を着たアルバート、戸口から入ってくる男爵——榆の木にミヤマガラス鳴くウィンザー城でのM卿⁴⁴のまどろみ——朝まだきに跪くカンタベリー大主教⁴⁵、老王の発する七面鳥を思わす怒声、クレアモン⁴⁶でのレオポルド伯父⁴⁷のもの柔らかな声、地球儀と天球儀を手にしたレーツェン⁴⁸、床を払い近づく母の羽毛の襟巻、鼈甲のケース入りの父の古い二度打時計、黄色の膝掛、懐しい小枝模様のモスリンの襷飾り、ケンジントン⁴⁹の樹々や草花——というようにさかのぼったのであろう。』⁽⁵⁾

皆様は、私が前に申し上げた新しい心理学が空気のように一般的になったというのを覚えておられるでしょう。そして、意識下にあるものを想像したこの長い流麗な最後の文章が、それより前には書かれる筈がなかったことに同意して下さると思います。

私が言及したり、引用したりした作家について一言。私は、私達の時期に属し、この時期に教育を受け、この時期固有の刻印を押されたといってよい人々に限って見てきました。アーノルド・ベネット、ゴールズワージー、ウェルズ、ベロック、チェスタトン、フランク・スウィナトン、ノーマン・ダグラス、バートランド・ラッセル、ロウズ・ディキンソン⁵⁰、ジョージ・ムア、マックス・ビアボームは、1920年以後良い仕事をし、何人かは今も現役です。しかし彼等はもう少し早い時期、即ち二つの大戦の早い方より前に影響を受け、態度を決めたのです。D. H. ロレンスは特別むつかしいのです。彼も入れて良いのかどうか。彼の最良の小説、『白孔雀』と『息子と恋人たち』は、1912年前後に出版されましたが、彼は生涯を通じて、予言と呪詛の言葉を等しくふり撒いています。これは、彼をずっと

以前の人に——はるか以前のカーライルにまで——見せます。ところが、彼は新しい経済学、新しい心理学の時代まで生き延び、1930年に死んだ時には、戦争を終えるための戦争がヴィクトリア朝の平和を終らせたに過ぎないことを良く知っていたのです。私自身の感じでは、彼は私達の視野に入って来ます。

私の話を要約しましょう。私達の扱った時期は、二つの大戦間の〈長い週末〉であります。既に存在していた経済、心理学の動きが激しくなりました。作家は、経済の変化には怯えたのですが、心理学の変化には刺激を受けました。散文は、文学のための手段でもあり、同時に日常生活の手段でもあるので、目の前で起きていることに殊に敏感です。二つの傾向に注目するのが良いでしょう。一つは、いま過ぎてゆくものを吸収する平俗化の傾向。もう一つは秘義的傾向です。こちらは平俗性を拒否し、芸術を通して平板さや流血より更に価値あるものを創りだそうとします。この時期の最高の作品は、この秘義的傾向を持っています。T. E. ロレンスは、行動の点では英雄的でしたが、行動するためには砂漠へと引き籠りました。リットン・ストレイチーは、真実と人間愛以外のものには幻滅したのです。

私達の時期の価値判断に関しては、いまお話ししたような理由で、私はそれを高い所に位置させたい気がしています。そして、この時期を衰退期と非難し、人類が20年代には享楽の度が過ぎ、30年代には理屈をこねるのに偏し過ぎたと叱る多くの批評家には同意しません。私達はぞっとする戦争に突入しているわけで、私達の文学的価値判断が最上の状態で行けるとはいえません。評価は全て一時的なものですし、またそうあるべきだと思います。そして、あくまで一時的にですが、私もこの〈長い週末〉は価値ある仕事をしたと申し上げようと思います。この時期を非難する傾向が優勢ですが、これに同調する前にどうか暫らく立止ってみて下さい。

—原 注—

(1) *Life among the English*, p. 46.

(2) Christopher Caudwell, *Studies in a Dying Culture*, 1938 (共産主義者

の立場からのこの時期に関する秀逸な評論）を見られたい。

- (3) *The Times*, July 28th, 1943.
- (4) *The Seven Pillars of Wisdom*, p. 17.
- (5) *Queen Victoria* (Phoenix Library edition), pp. 268–9.

—訳 注—

- 1 Siegfried Sassoon (1886–1967) 詩人。 *War Poems*, 1919; *Memoirs of an Foxhunting Man*, 1928 外。フォスターの親しい友人。
- 2 恐慌, スペイン内戦, ファシズム, ユダヤ人弾圧, 独軍ポーランド侵攻, 英・仏対独宣戦布告, ソ連軍ポーランド, フィンランド侵攻など。
- 3 Lytton Strachey (1880–1932) 伝記作家。人物の内面を描く手法で伝記文学に革新をもたらした。フォスターとはケンブリッジ以来の友人。フォスターの作品を余り評価していないのは興味深い。
- 4 James Joyce (1882–1941) アイルランドの小説家。 *Dubliners*, 1914; *A Portrait of the Artist as a Young Man*, 1916; *Finnegans Wake*, 1939 外。
- 5 Virginia Woolf (1882–1941) *The Voyage Out*, 1915; *Jacob's Room*, 1922; *Mrs Dalloway*, 1925; *To the Light House*, 1927; *The Waves*, 1931; *The Years*, 1937 外。フォスターとは相互の作品につき意見を交換していた。
- 6 Marie de Rabutin-Chantal Sévigné (1626–1696) フランスの書簡作家。 *Lettres de M^{me} de Sévigné*, 14 vols., 1862–76 (娘にあてた書簡集) で知られる。ラ・ファイエット夫人, ラ・ロシュフーコーの友人。〔『フランス文学辞典』, 1975年刊参照〕
- 7 Rose Macaulay (1889?–1958) 小説家, 批評家。 *Dangerous Ages*, 1921; *Told by an Idiot*, 1923 外。フォスターの友人。
- 8 フロイトの精神分析, ヘーゲルの観念論を基盤に, 人間精神の全面的解放を目指した, 文学・芸術上の前衛運動。1919～第2次大戦の間に少しずつ変質しながらも, フランスを中心に国際的にも広く支持された。〔『ブリタニカ国際大百科辞典』, 1973年刊参照〕
- 9 Marcel Proust (1871–1922) フランスの小説家。人間の内面を描く手法をとり入れた大作『失われた時を求めて』(7篇), 1913–27は20世紀最大の小説とされる。
- 10 共産主義者とファシストの戦いといわれた, スペイン内乱 (1936～39) を指すのであろう。
- 11 Thomas Edward Lawrence (1888–1935) 冒険家, 著述家。オックスフォードで考古学を専攻。卒業のため中東各地を単独踏査し, 大英博物館のアラビア・シリア調査 (1910–14) に加わる。イギリスは, 第一次大

- 戦でドイツ側に加わったトルコの後方攪乱のため、トルコ圧迫下のアラビア人を支援（利用）した。情報将校として派遣されたロレンスは、フェイサルに傾倒、アラブ独立を助けてトルコ軍を破り 1918 年ダマスカス入城を果す。フォースターの友人。『西洋人名辞典』, 1981 年刊参照]
- 12 1919 年のパリ講和会議で英仏による中東に対する帝国主義的野心が露呈し、戦中英国がロレンスを通じ与えていたアラブ独立の約束は反古にされた。ロレンスは会議の最中もその後も英仏首脳、マスコミにアラブ自治を働きかけたが空しく、以降のロレンスは「贖罪的苦行」の生活を送った。
 - 13 Evelyn Waugh (1903–66) 小説家。 *Decline and Fall*, 1928; *Vile Bodies*, 1930. *Black Mischief*, 1932 外。次のグリーンとも共通するが、社会にほんろうされる個人を描いた。
 - 14 Graham Greene (1904–) 小説家。 *The Man Within*, 1929; *It's a Battlefield*, 1934 ; *England Made Me*, 1935 外。
 - 15 Sigmund Freud (1856–1939) オーストリアの精神病理学者。1896 年ヒステリーの研究に用いた自由連想法による治療法を精神分析と名付けた。『夢判断』, 1900 年刊; 『性の理論に関する三つの論文』, 1905 年刊; フロイトの説は論議を起しつつも 1908 年ユングの提唱により第 1 回国際精神分析学会が開かれた。1907 年以降文学にも影響を及ぼした。『社会科学大辞典』, 1970 年刊参照]
 - 16 Emily Brontë (1818–48) 小説家。ここでは *Wuthering Heights* の象徴性のことを念頭においている。
 - 17 Herman Melville (1819–91) アメリカの小説家。 *Moby-Dick* の白鯨が持つ象徴性についてフォースターは、『小説の諸相』, 1927 年刊や「小説の技法」(1944 年 B. B. C. 講演) でも言及している。
 - 18 Samuel Butler (1835–1902) 小説家。 *Erewhon*, 1872; *Erewhon Revisited*, 1901 外。
 - 19 Gertrude Stein (1874–1946) アメリカの詩人, 小説家, 批評家。〈意識の流れ〉の手法を実験, 主張した。ここでは, *The Autobiography of Alice B. Toklas*, 1933 における会話体の実験のことであろう。フォースターは『小説の諸相』でもスタインの小説技法に注目している。
 - 20 Dorothy Miller Richardson (1882–1957) V. ウルフ, ジョイスと並び, いわゆる 〈意識の流れ〉の手法を試みた小説家。 *Pilgrimage*, 12vols., 1915–38 外。
 - 21 D. H. Lawrence (1885–1930) 小説家。フォースターと交遊があった。フォースターのロレンスに関するエッセイがある。
 - 22 Walter de la Mare (1873–1956) 詩人, 小説家。 *Songs of Childhood*,

- 1902; *The Return*, 1910 (小説); *The Listeners*, 1912 外。
- 23 Elizabeth Bowen (1899-1973) 小説家。 *The Hotel*, 1927; *The Last September*, 1929; *The Cat Jumps*, 1934 外。
- 24 Aldous Huxley (1894-1963) 小説家。 *Crome Yellow*, 1921; *Point Counter Point*, 1928; *Brave New World*, 1932; *Eyeless in Gaza*, 1936 外。
- 25 John Livingston Lowes (1867-1945) アメリカの英文学者。 *The Road to Xanadu* はコールリッジ論の古典となっている。
- 26 Arnold Toynbee (1889-1975) 歴史家。 *A Study of History* は、全10巻より成る。1939年、大戦の勃発で中断するまでに6巻が出ていた。宗教的観点による新しい史観に基くこの著作が、歴史に造詣の深いフォースターに、小説という言葉を使わせたのであろう。
- 27 旧約聖書詩篇127篇に 'Except the Lord build the house, they labour in vain that build it' とあるのを踏まえたもの。
- 28 Mme. Verdurin 『失われた時を求めて』の主要人物の一人。富裕で教養ある平民（ブルジョワ）を代表する。そのサロンを踏み台にして終結部では、この作の貴族を代表するゲルマント公爵のいとこゲルマント大公夫人となりパリの社交界に君臨する姿が提示される。〔*The Oxford Companion to French Literature*, 1969 参照。〕
- 29 Euston ロンドンの主要駅の一つ。壮麗な建物で知られる。スコットランドへ通ずる路線の始発駅の一つ。
- 30 M. Jourdain モリエールの『町人貴族』の主人公。哲学の先生を傭って伯爵夫人を口説くにふさわしい言葉遣いを習う際、自分がしゃべっているのが散文と教えられ、驚く箇所がある。
- 31 Christopher Isherwood (1904-) 小説家。ルポルタージュ的手法で知られる。フォースターの友人。オーデンと共にドイツに4年滞在。 *Mr Norris Changes the Train* は *Goodbye to Berlin*, 1939 と共にこれに取材したもの。後、オーデンと共にアメリカに渡り、帰化。
- 32 *The Bible designed to be read as Literature* (原文どおり)
- 33 新約聖書マタイ伝25章21節及び23節に 'Well done thou good and faithful servant' とあるのを踏まえたもの。
- 34 ソネット19番14行に 'They also serve who only stand and waite' とあるのを踏まえたもの。
- 35 St. Augustine (354-430) 初期キリスト教最大の神学者、哲学者。 *City of God; Confessions* を表わす。
- 36 *Seven Pillars of Wisdom* 私家版として1926年、一般向け1935年。アラブ叛乱の記録文学。数度の加筆、削除を経て約280,000語から成る。アラ

ブ人、戦争の何たるかを語ったこの本は、内容、構成、文体とも高い評価を得た。チャーチルも英語で書かれた最高の書物に伍すものと絶賛している。

- 37 Charles George Gordon (1833-85) 中国で大平天国の乱を平定、後にスーダンの反乱で戦死した将軍。『ヴィクトリア朝偉人伝』の中でとり上げられている。
- 38 Albert (1819-1861) Prince Consort of England. 1840年ヴィクトリア女王と結婚。ザクセン・コーブルク・ゴータ家の出身。ヴィクトリアの信頼に支えられ、名目上はともかくアルバート王政と呼ばれるほどイギリスの政治に実質的影響力を及ぼした。
- 39 Osborne イングランド南部、ワイト島にあったもと英国王室の離宮。1845年ヴィクトリア女王が購入し、好んで利用した。[『オックスフォードカラー英和辞典』, 1982年刊参照。]
- 40 Lord Beaconsfield 文人政治家ディズレーリのこと。女王の信頼があつかった。
- 41 女王は病床のディズレーリにオズボーンのさくら草を度々贈り、その死に際しても「彼の最愛の花」として供えたという。[アンドレ・モーロワ『ディズレーリの生涯』, 1927, 安東次男訳, 1962年刊参照。]
- 42 Lord Palmerstone (1784-1865) 第三代パーマストン子爵ヘンリー・J・テンプル。外相も務めた政治家。初めアルバート公と、後には女王と意見が対立。51年ヴィクトリアの同意なくルイ・ナポレオンのクーデターを承認して解任された。
- 43 Balmoral 女王の好んだスコットランド東北部の離宮。1855年古い城館を改築したもの。
- 44 Melbourne (1779-1848) 政治家。ヴィクトリア治世の初期、政治的助言者として重要な役割を果たす。首相も勤めた。
- 45 Archbishop of Canterbury 1837年6月20日早朝、ヴィクトリアは、カンタベリー大主教とチェンバレン卿からウィリアム四世の逝去を知らされ、同日午後王位継承が決った。
- 46 Claremont 次項レオポルドの居住地。
- 47 Leopold ヴィクトリアの伯父。ザクセン・コーブルク・ザーフェルト家の出身。後ベルギー王レオポルド一世となる。
- 48 Louise Lehzen コーブルグ出身のヴィクトリア幼少期以来の養育係。長期間ヴィクトリアに仕えた。
- 49 Kensington ヴィクトリア女王が1819年、ジョージ三世の四男、ケント公エドワードの唯一の子として生まれたのはここケンジントン宮。殆ど母親とレーツェンだけを相手にして、ここで成長した。

1985. 3 『1918年から39年に至る英語散文の発達』(井関) 157 (1079)

- 50 Goldsworthy Lowes Dickinson (1862-1932) 歴史家, 社会批評家。
フォースターは彼にケンブリッジで指導を受けた。遺族に依頼され1934
年には, ディキンソンの伝記を出版している。

訳者あとがき

これは、フォースターの *The Development of English Prose between 1918 and 1939*, Jackson, Son & Company, 1945 の全訳である。

同じく講演であった『小説の諸相』(1927) が広く読まれ、論議を呼び起こしている一方で、中世英文学の大家 W. P. ケア教授を記念したこの講演は量的に少ないこともあろうが、殆んど知られていない。訳者も 1983 年、中京大学の在学研究員としてケンブリッジ滞在中、同大図書館で初めてその存在を知ったのであった。しかし、散文の一般的傾向という珍しい取り上げ方をしている点、またフォースター自身の好みを率直に出している点で、無視できない内容を持っており、再刊も望めそうもないので、翻訳を試みた次第である。なお、この講演は場所を変え何度か行われた。

フォースターは、両大戦下、両大戦間にはどんな作家も戦争の影響を受けるとした上で、経済の動き、科学（心理学・物理学）の動きは更に大きく影響すると述べている。経済の動きについていえば、その影響は、ここで扱う時期より少し前の 1910 年代にも、程度はともかく、及んでいることを指摘したい。フォースター自身の『ハワーズ・エンド』(1910) はその一例である。また科学の動きでは、一般にはフロイト、ユングに加えてウィリアム・ジェイムズの心理学や、ベルグソンの哲学、また芸術では後期印象派の絵画などの影響が指摘されるところである。

1918～1939 という期間についていえば、それはロバート・グレイヴズとアラン・ホッジの『長い週末—大英社会史 1918—1939』(1940) での期間そのままであり、ここから借りているのは確実であろう。尤も第一次世界大戦の終結から第二次大戦の勃発までというのは、一区切りとして極めて妥当な期間であって一般に広く使われていたと思われる。

フォースターは、この時期の散文の二つの傾向、即ち、世相を反映して平明、庶民^{デククラティック}的、通俗的になる平俗化の傾向“the popular tendency”と、反対に世俗に背を向け、人間の内面や潜在意識の世界を重層的に含めようとする秘義的傾向“the esoteric tendency”を挙げた上で、後者を評価している。具体的には、T. E. ロレンスと ストレイチャーを引くわけであるが、

ロレンスのそれは、『智恵の七柱』の中でも最も秘義性に富む部分が引かれており、フォースターの好みをみせているのは興味深い。

ストレイチャーについては、ディヴィッド・ガーネットが、伝記作家としてのジョン・メイナード・ケインズへの影響をミロ・ケインズ（編）の『ジョン・メイナード・ケインズ論集』（1975）で述べているように、当時の人気とも併わせ、相当の影響力を持っていたようである。従って必ずしもフォースターの好みに偏した選択とはいえないであろう。

マルカム・ブラッドベリーは、1908～1915にはロンドンが、モダニストの運動の中心であったが、第一次大戦後中心がパリに移ったこと、小説でいえば、『ユリシーズ』やフォード・マドックス・フォードの『パレードの終り』四部作、ヴァージニア・ウルフの主要作品が現われる（1922年前後）ものの、1925年頃には運動は息がつかたと見られるとしている。さらに、批評におけるこの運動の受容の高まりは、1940年代と50年代——作家がモダニズムから離れるように見える時期——にやって来たとも述べている〔『現代英文学の社会的背景』（1971）において〕。これを踏まえると、1944年の時点で、フォースターが代表的作家として、ウルフ、ジョイスの名も加えながらも、散文としての典型から外したのは、もともとこの二人の散文は、本質的に一般的散文の代表とはなり得ないものであるにせよ、極めて自然なことであつたらう。

ともあれ、フォースターはこの時期を代表する散文として T. E. ロレンス、ストレイチャーの文章を挙げ、特に後者が心理学の洗礼を受ける以前には書かれるはずがなかったとしている。しかし元々秘義的なものを尊重しない人間が、心理学なり物理学のアイデアが溶け込んだ空気を呼吸したところで何も生まれないのであって、ここでなされた選択には、フォースターの好みが反映しているのもまた確かである。伝統的な文学技法の枠組みを外れず、何か神秘的なもの、真実なものを新しい実験的手法を援用して提示する（意識の流れでも、象徴、リズムでもよい）——となれば、これは外でもない、フォースター自身が試みてきた世界である。フォースターはむろん自作に言及してはいないが、この講演は、フォースター研究者の

思いを、自ずと彼の作品のあれこれに誘うのである。

なお、訳文中にみられる〔 〕は訳者が補ったものである。また訳注のうち、作家等についての項では、作品を挙げる際、原則として1918～1939の代表作品に留めた。

最後に、『ヴィクトリア女王』及び『智恵の七柱』よりの引用部分を訳出する際、それぞれ上田和夫氏（富山房百科文庫）、柏倉俊三氏（平凡社東洋文庫）の訳を参照させていただいたことを感謝と共に記しておきたい。むろん文章上の責任はすべて訳者のものである。

1985. 1. 22.